

横浜の文庫それぞれ

文庫の多様性

- ① 汐見台文庫の活動
- ② 私たちの文庫「こどものへや」
- ③ 大多良文庫

① 汐見台文庫の活動

鈴木陽子

——はじめに

「久しぶりね」「よかったわねえ」届けられた本の山を見て、文庫に集まった運営委員誰もが笑顔になった。今日が最後の配本になるかもしれないという思いを、一瞬忘れさせるほどうれしかった。五〇〇冊の本の交換が終わって、お茶とお菓子を出す。休暇を返上して配本してくれた市役所の職員に、せめてもの橋（ねぎら）いである。いつもと同じように、図書館員おすすめ本の紹介が始まった。配本と共に司書が来るからこそ、この心楽しいサービスもおしまいな

かと思うと、何ともやりきれなかった。

汐見台文庫は、横浜市図書館から三、〇〇〇冊の本を借りている。五〇〇冊から一、〇〇〇冊位の文庫が多い中で、桁はずれの冊数である。これは汐見台団地全域約四、〇〇〇世帯が利用対象になっているため、現在は寄贈本と合わせて約五、〇〇〇冊の蔵書がある。冊数では市内最大規模の汐見台文庫でも配本の廃止から半年も経たないうちに、困ったことが目立ち始めた。

クリスマス行事に使う絵本を探したが、書架にはタナバタの本しか見当たらなかった。三カ月に一度の配本で約五〇

〇冊の本を入れ替えていたのだが、入れ替え月の九月から配本廃止となったために、六月以降、本が替わっていないのである。十二月の貸出日には、ご年配の方が借出券を置いて帰られた。「新しい本が無いので借りたい本が無くなってしまっ。年寄りには図書館は遠くて行かれませんから、こちらでお借りできればと思うんですけど。」その言葉に、次に新しい本が入るのは何日ですと答えることができなくて、無念だった。読書傾向の定まっている大人には、本が入れ替わらなければ読みたい本はすぐ底をついてしまう。暮には、借出券を置いて帰った子

も、例年になく多かった。

- 一——はじめに
- 二——文庫の運営なら私たちが
- 三——汐見台に図書館を
- 四——文庫の現状とこれから

組合の自主代行配本（横浜市従業員労働組合教育委員会支部の活動として実施）を受けましょうという提案は、新年最初の運営委員会ですぐ決まった。これまで「配本制度の存続拡大を求める連絡会」の一員として、汐見台文庫も「連絡会」の決定（図書館業務としての配本制度の存続拡大を求めているので、変則的な組合の代行配本は受けられない）に従ってきたが、暮には市議会の回答も出てしまっていた。

横浜市図書館が文庫への配本廃止を強行してからも、引き続き再検討を願って

署名集めや陳情をしてきたのだが、十二月十九日、市議会は当局の説明だけを聞き、了承してしまった。当局の回答には「横浜市図書館において行ってきた配本車による団体貸出は、九月から来館による貸出に変更し、配本は廃止した。今後図書館で配本することは考えていない」とある。

配本の廃止など、三〇〇万市民にまだ九つの図書館しかない自治体の考えることではない。公共図書館は市民の知る権利を保障するところだから、機会均等であるべきで、図書館から遠い市民には図書館が向いてサービスする、というのが近代図書館の精神である。その精神に基づいて横浜市図書館が、より多くの市民に図書館の本が利用できるようにと始めた団体貸出制度は、画期的だったはずだ。汐見台文庫も、この公の本を団地住民の誰もが利用しやすいように、町内会単位の団体貸出を受ける方針で考えられたのである。

二——文庫の運営なら私たちが

汐見台文庫の記録ノートの第一頁を開くと、「昭和四十六年九月二三日夜、汐見台文庫設立について」の最初の話し合いがもたれたことが記されている。汐見台文庫設立準備会の発足である。出席者に

は自治会連合会長と文化広報部長、文化広報部員のほか、文庫の運営なら自主的に集まった二〇人の主婦の名が書かれている。今は、このメンバーのほとんどが汐見台を離れているが、現在も運営委員として残っている三人は準備会発足の一年も前から文庫の仕事ならやりますと自治会長に申し出ていた人たちであった。

準備会ができる前年の一九七〇（昭和四十五年）五月、汐見台団地に毎月各戸配布されている『汐見台ニュース』が、汐見台会館内に図書館できそうと一面トップで報じた。この図書館とは自治会文庫のことである。続いて六月号で『自治会連合会は文庫開設のため、一八万円の予算を計上』と報道したが、その年度も過ぎ翌年の夏になっても、まだ文庫はできなかつた。

汐見台団地は一九六三（昭和三十八）年に入居が始まり四年後にはほぼ完成したが、産労住宅約三、〇〇〇戸、分譲約七〇〇戸、賃貸約三〇〇戸、人口一万余千の大団地である。一丁目、二丁目、三丁目と別々につくられた自治会が統合されて、汐見台自治会連合会（以後、連合会）となったのが一九六九（昭四十四）年の春で、自治会文庫はその連合会で当初から計画されていた。団地中央に建設された汐見台会館（神奈川県団地住宅福祉協会経営）内に開設場所も確保してある、

という協会理事からの話もあった。にもかかわらず、連合会が文庫開設に踏み切れないでいた裏には、文庫活動への認識の浅い役員の見直しもあったというが、運営の人手にも頭が痛かっただけに違いない。あまりに長いおあずけに、「図書館はまだなの『手伝います』役員さん」という投書が、夏休みを前にした七月『汐見台ニュース』に掲載された。

一方、横浜市図書館が団体貸出の拡大に力をいれ始め、普及係を新設したのは一九六六（昭四十一）年のことだった。

その頃から町内会や自治会に、人手と場所があれば図書館から本を運びます、という呼びかけが積極的に行われた。また、一館しかない市立図書館の及ばないところを、県立図書館もカバーしていた。汐見台では当時、県立図書館の団体貸出用の図書を運ぶファミリー文庫（車）も来ていたし、市図書館の移動図書館はまかせ号も巡回していた。すでに小グループで市図書館の団体貸出（グループ貸出）を利用している人たちもあつた。

夏休みも終わった九月の夜に、連合会がやっと話し合いの場をもったのは、それらの公共図書館のサービスに目覚めていた人たちが、文庫運営に関心のあつた人たちが、『汐見台ニュース』への投稿や座談会で発言するなどして、連合会に働きかけをしたからだ。文庫運営の

人手は、私たちが責任をもちますと申し出たのである。

こうして汐見台文庫は、一九七一（昭四十六）年十一月二十日、準備会発足から僅か二カ月後に誕生した。横浜市図書館届出の団体名が、汐見台文庫ではなくて「汐見台自治会連合会」であるのは、町内会貸出を利用する地域文庫としてつくられたためである。文庫が開設されると同時に、市図書館は汐見台への移動図書館巡回を停止し、県立図書館のファミリー文庫も来ないことになったので、汐見台文庫は事実上、図書館の分館的役割を担うことにもなった。

このような事情で、連合会運営の地域文庫として発足したのだが、図書館行政の不足を補う末端サービスポイントとしての文庫への理解がなかなか得られず、現在は、自主グループ活動という形になつている。

三——汐見台に図書館を

汐見台文庫で、設立当初から現在まで文庫活動の中心にいる唐井永津子さんは「まず地域文庫をつくって公の本が利用できることをみんなに知ってもらい、次いで図書館づくりに発展させたい」と初めから考えていた人である。文庫開きの日に『押すな押すなの人気——ラッシュ

アワーさながら」（『汐見台ニュース』昭四十六年十二月）となった汐見台文庫は、一年後の一九七二（昭四十七）年十一月、唐井さんの言葉通り、汐見台に図書館をの運動も始めることになった。

二回目の貸出日に、五〇〇冊の児童書が六冊しか書架に残らなかったなどという事態は、この団地にサービスの拠点が一つあってもいいことを示していた。

その年、市社会教育委員会が出した『横浜市図書館行政の施策と展望』（以下「答申」）は、公共図書館はさまざまな規模の図書館が有機的に結ばれ、自治体全域にサービスがゆきわたるようネットワーク化されなければならないと述べていた。まさに汐見台団地は、この「答申」の中の小さな図書館があってもいいところだった。しかし、他自治体からも注目された「答申」の横浜方式（地域ごとに大小の図書館群をつくる）は、ついに構想にとどまったままで、汐見台自治会連合会の図書館づくり運動は今も続いている。

汐見台文庫の歴史は、七十二年の汐見台への図書館誘致運動以来、絶えることのない図書館運動の歴史だった。運動体ではない文庫の、市民運動家ではない主婦の活動でありながら、本の貸出や学習、おはなし会やクリスマス会などで過ごせた年は一度もなかった。

汐見台が最初の陳情を出した年は、ユ

ネスコが「みんなに本を」の合言葉で、図書館の意義と役割を明らかにした八国際図書年であった。そのため、マスコミがいつせいに横浜市図書館行政の遅れをつき「答申」が出たこともあって、図書館が動き出す気配が感じられた。だが、「汐見台に一日も早く図書館をつくってください」という陳情書に対する市議会の回答は、「四十八年度に建設する磯子センター内の図書館をご利用ください」というものだった。一方、四十九年に届いた市長回答には「ご要望の『小さな図書館』を汐見台に設置することについては今後とも検討してまいります」とあったため、文庫の運営委員たちはその文書を何度も読み合い、どんな小さな図書館を考えてくれるのだろうと三月待った。今思えば、公共図書館の設置とは本館、分館などのサービスマネジメントと期待していたから、「答申」の実現かと期待したのだ。

ところが、市庁舎へ足を運んだ文庫の運営委員は、市は小さな図書館（分館）をつくって団地や町内会単位のサービスマネジメントをすることは全くない、という返答を企画調整局から聞かされたのだった。つまり、どのような小さな図書館をつくらうかと検討したのではなく、分館をつくらうか検討したのではなく、つくらな

ことにしていたのである。

この時から、横浜市には長期的構想の図書館政策がなく、「答申」の精神も実行する姿勢がないことを汐見台文庫の運営委員たちははっきり知ったのだった。そこで、地域ごとに図書館をもちたいと願っていた戸塚、美しが丘の有志に声をかけ、一九七五（昭五十年）年、「横浜市に図書館をつくる住民運動連絡会」を結成したのである。汐見台としては、市の政策が分館網づくりへと向かわない限り、汐見台に図書館ができることは望めない。他の文庫の人たちと協力して運動をすすめることにした。

現在全市の文庫の人たちの最大の関心事である配本車廃止に対しては、一九八四（昭五十九）年に「配本制度の存続拡大を求める連絡会」をつくったが、八十二年にこの問題が起こった時から、汐見台文庫は署名集めの事務局を引き受けるなど、常に運動の中心的存在となってきた。また、八五年秋に発足した「横浜の図書館を考える集い」にも、文庫として参加して、全市的視野に立った図書館政策がつけられることを願って活動している。

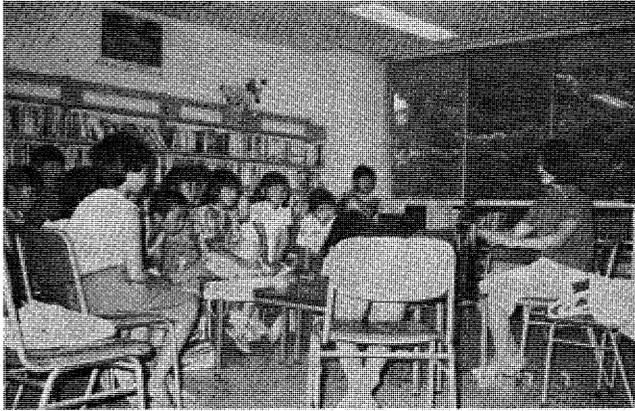
四——文庫の現状とこれから

文庫は自主的な活動だから、地域の図

書館へ自分で本を取りに来るようという当局の論理は、実情をあまりに把握していない。汐見台の人たちにとっては、磯子図書館は生活動線にないから、利用できる人は限られている。しかも小型館なので文庫への団体貸出は行っていない。区内に図書館があっても、歩いていける所にいない住民にとっては、身近な文庫は唯一の読書施設である。

だが、図書館と違って本のリクエストはできないのが文庫だから、本の入れ替えが無ければ死んだも同然の施設となる。汐見台文庫では、本の入れ替え作業だけでも三日かかるが、文庫の運営に自主的に参加しようという人がいるからこそ、図書館の本を地域に供給できるのだ。言いかえれば、図書館は本を届けるだけだが、そのことで、自主的な活動が生まれ、育ち、辛うじて続けてこられたのである。

一九八五（昭六十）年の活動報告を見ると、図書館問題の会合に出席したのが五〇回にも及び、配本車廃止反対に終始回参加しているが、文庫本来の行事としては、深沢一夫氏による脚本の勉強会、夏休み向けおすすめ本のリスト作成（小学校・中学校へ配布用）、絵本作家・梅田俊作さん講演会、利用者との懇談会、クリスマス会などを行っている。



もちろん日常活動としての週二回の本の貸出、おはなし会、月一回の運営委員がある。また、文庫に関係のあるサークルに、子どもの本を読む会、親子読書会、いそしお学級、よこはまおはなしの会、近代史読書会などもあるので、それらの全部に加わっているほか、PTA活動や汐見台文庫以外の活動にかかわっている人もいて、文庫運営委員個人の生活

はたいへん忙しい。それでも、これまでの文庫の学習会では、絵本やマンガやファンタジーを知る学習のほかに、青少年図書館、地区センター図書室、学校図書館の地域開放の実態について調査資料をつくって話し合っ

てもきたし、「委託」や「民活」の問題点も学んできた。当然、図書館とは何かを知るための本も読んだし、市内はもちろん他都市の図書館も見て来た。だから、横浜市の図書館行政は後ろ向きだと思いい、近年ますます市民サービスの姿勢から弱者切り捨てへ向かっているイメージを強く持つ。

図書館当局は、配本抜きという条件は省いて、団体貸出は一館から五館に移行したと説明するから、何も知らない人たちは配本は過剰サービスなどと思う。東京都なみに図書館サービスを受けるには、横浜にはあと七〇館も必要という認識も無く、たった九館でも多館時代と言われてうなづいてしまふ……。

汐見台文庫の昨年一年間の貸出冊数は約一五、〇〇〇冊、利用人数は約八、〇〇〇人だった。利用者は減ったとはいえ、主な利用者は幼い子どもたちとお年寄りだから、汐見台文庫運営委員会としては、文庫が公共図書館の窓口と代わる日まで頑張っていこうということになった。文庫の運営をする人がいる限り、そして次に記す吉田三紀さんのような利用者がいる限り、存続の努力をやめることはないと思う。

汐見台図書館
浜小2年 吉田 三紀

わたしは 図書館に 入って(登録)います。図書かんで は おはなしかいが大きいです。水よう日の おはなしかいは、とつてもおもしろいです。(中略)

わたしは、おはなしかいが 土よう日にもあつたらいいな、と思います。おはなしをするときは、まらげえないうように、いっしょうけんめいだと思

わたしは 図書かんであつて、しあわせです。本を かってもらわなくても、しらない本が かりて よめるからです。だれが、図書かんで かんがえたのかなと、かんがえる ときも あります。

汐見台図書館の 人たちは、みんなやさしいので、どうどうと 話が、できます。(中略)

まえに、いちどかりたのに、すぐよんじやつたので、おとうさんと また、かりに いったときが ありました。わたしは2どいくのが ちよつとはずかしかったので、おとうさんの うしろからいったことが ありました。でも、やさしくしてくれました。わたしは 図書かんで、大きいです。わたしは、図書かんで あつて、とつても いいです。

(汐見台自治会連合会汐見台文庫「汐見台に図書館を——汐見台文庫の10年」から)

△汐見台文庫運営委員会▽